山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第16号（2003.8）

平面構成の学習と美術教育の学力について

宇多田久美子※　　福田　隆眞

On the Ability of Art Education through a Practice of 2 Dimensional Composition.

UTATA Kumiko※ and FUKUDA Takamasa
(Received June 18, 2003)

キーワード：美術教育　学力　平面構成　表現

はじめに

新しい教育課程が実施されて、学力に対する考え方が変化している。従来までの知識や技術の習得だけでなく、思考力、判断力、表現力さらには興味・関心といった情緒的な側面までを含んできている。いわゆる生きる力である。生きる力の育成のために、体験的学習や問題解決学習を重視してきている。総合的な学習の時間の創設もその例である。

美術教育の内容は表現領域と鑑賞領域に分かれ、知識や技術の習得だけでなく、学習方法として実習や問題解決学習によるものが多く存在している。その意味からすると、美術教育は従前から生きる力の育成をしてきている。しかし、教育課程の改訂によって美術教育では授業時間数の削減が生じてきた。教育課程の目的を実施するには時間数が不足している状況にある。この状況において、本稿はあらためて平面構成の授業を取り上げ、その意義について以下に述べる。

1　新しい学力観について

新しい教育課程においては、学力に対する考え方が従来よりも変わってきていることが特徴のひとつとなっている。知識習得主義から学習方法の習得へと変わってきている。いわゆる内容知から方法知への転換が促されているのである。このことは中央教育審議会のまとめの中で次のように説明されている。「教育水準を考えるに当たっては、学力を単なる知識や技能の量の問題としてとらえるのではなく、その後の学習や生活に生きて働く資質や能力との関連においてとらえ直す必要がある。すなわち、学力については、学校、家庭及び地域社会における学習や生活を通して子どもが自ら考え主体的に判断し行動するために必要な資質や能力として身に付けるものであると考えることが大切である。」

このように主体的に考えたり判断したりする学習そのものを学力に含めているのであり、そのために児童生徒の体験的な学習や問題解決学習を従来よりも多く取り入れて、こうした能力の育成を促そうとしている。主体的な学習により育成しようとしている内容はいわゆる「生きる力」である。それはもっと厳密に言えば「生き抜く力」であろうと思われる。

※　山口県小郡中学校教諭

この生き抜く力は、いかに社会が変化しても自分で問題を見つけ出し解決していく総合的な力と考えられる。それは知識や技能に加えて表現力、思考力、判断力、さらにそれらを支える関心、意欲、態度といった情緒面をも含んだ概念であるといえる。

新しい学力観は情緒的な側面をも含むことによって、検証が困難な面を持っている。意欲や関心が高いことがすなわち知識や技術をたくさん習得することにつながるか否かは別であろう。差し迫った解決すべき問題が児童生徒の生活環境にどの程度存在しているのかは確定が困難であると思われる。問題解決学習を導入することに異論はないのであるが、問題の発見を主体的に全ての児童生徒ができるとは限らないのである。やはりある程度の系統的な学習によって学習内容の基礎・基本を習得しながら、同時平行で個々の具体的問題解決学習を設定する必要があると思われる。

系統的な学習によって習得する基礎・基本としての知識や技術は問題解決学習を遂行する上で必要欠くべからざる内容である。教育課程の改訂によって知識や技術の量を無理やり厳選することによって返って問題解決学習をすることが困難な状況に至った例も見受けられる。また、教師と児童生徒のかかわりの中で、支援という言葉がクローズアップされたことにより従来の援助や指導、指示といったかかわり方が敬遠される時期もあった。しかし児童生徒の実態を踏まえた上でかかわることが重要であり、そこには指示や指導があっても当然なことである。児童生徒の主体性ということを強調するあまりに、授業の全てが児童生徒にあるかのように解されることがあるが、学習の主体は児童生徒であるが、授業の責任はあくまでも教師にあるのである。

新しい教育課程によって学力の理解に幅が広くなった。しかし思考力や判断力を支えるものは経験や体験だけでなく必要とされる知識や技術を伴うものである。こうした必要性を児童生徒が実感することこそが新しい教育課程の遂行を成功させる道となるであろう。

次章ではこうした新しい学力観において、美術教育での具体例を述べる。

2　美術教育の学力

ここでは、「中学校における美術教育の学力とは何か」ということを指導及び支援の立場から述べてみたい。中学校学習指導要領においては、美術科の目標として「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的能力を伸ばし、豊かな情操を養う。」と挙げられており、そのことを念頭におき、日々における生徒の学習活動の指導にあたっている。美術科の教科性としては、技能や知識のように目に見える能力としての学力と、発想や創造性のような目に見えにくい内面性を重視した資質としての学力の大きく２つの側面に分けられるのではないかと考える。前者においては、「思うように形が表せる、色がつくれる、遠近感や立体感の表現ができる、必要な用具が適切に安全に使用できる」などの美術科における基礎的技能及び態度の習得である。このことは、生徒自身が「自分にも描けた、自分にもつくれた」という喜びと自信につながり、生涯にわたり美術を愛好していくための大切な要素の一つであるといえよう。次に後者においては、人間が生まれてから今日までの生活経験の集積が、大きく創造活動に影響を与えるものだと考える。例えば、あるテーマをもとに思いをめぐらし発想を繰り広げる際に、それが多く深いほど豊かな感情や考えを生みだし、空想や想像力を広げるイメージ力の高いものとなる。そこで、このような学力を身につけさせるための視点として、観点別評価項目に着目してみていく。

観点別評価項目

下記が美術科における観点別評価項目である。この４項目について「指導と支援」という角度から分析してみたい。

観点別評価項目	① 美術への関心・意欲・態度
	② 発想や構想の能力
	③ 創造的な技能
	④ 鑑賞の能力

① 美術への関心・意欲・態度を身につけさせるために

学習活動を進める中で、いかに達成感や充実感を持たせるかという点においては、「いかにその気にさせていくか」という点に答えはある。一例を挙げるならば、彩色の苦手な生徒が単純な形を輪郭からはみ出さず美しく塗ることができたというたった一つの小さな成功体験がもとで自信をつけ、「自分にもできた、次はもっとできるようになるかな、もっとやってみたい」という感動体験の積み重ねが「自ら学ぶ姿勢」を培う一つの手だてなるのではないかと考えている。

② 発想や構想の能力を身につけさせるために

この学習段階においては、作品をつくりあげるために創意工夫を凝らし、いかにアイディアスケッチをさせていくかという点に重きを置いている。ここではなるべく数多くのアイディアスケッチをすることで、点は線となり線は面となり形に変化し、生徒の意図とする表現を可能にする。このようなイメージトレーニングをくり返すことで潜在的に備えている資質がさらにコーティングされ、豊かな発想力及び構想力を培うことができる。

③ 創造的な技能を身につけさせるために

技能はまず基礎的技能の習得から出発する。技能を身につけさせるためには、理論的に詳しく説明するとともにじっくり修練する学習活動の時間を設定し教えるという場面が必要である。また、作品を制作していく過程において、その行為に「はまった（夢中になる様)」と生徒が実感したときにはそれがまさしく基礎的技能を獲得した瞬間であり、それが土台となり創造的技能へと発展していくものであると考える。

④ 鑑賞の能力を身につけさせるために

鑑賞においては、芸術作品を見ることによって、そこから何かを感じ取ることが基本であり、さらにはあらゆる角度から観察し洞察的な思考をめぐらすことを通して、自分自身の素直な感情を美術科の専門用語を使い、適切に表現できるように授業を仕組んでいくことが重要である。

美術教育における学力とは何かということであるが、総じていうならばやはり創造活動を通して、将来、社会がどのような状況になろうとも、人としてよりよく生き抜いていくための大切な要素を鍛え育んでいくことではないだろうか。

3　平面構成の学習内容

ここでは美術科における中学校１学年の授業実践について紹介する。そこで平面構成の学習指導を通して、「生徒の思い、教師の思い」を赤裸々に述べていく。

＊　授業実践（生徒作品）
○　題材名　・・・「自然物と人工物による平面構成」
　　指導時間・・・25時間
○　題材における指導計画とねらい

段階	学　習　内　容	時間	学習のねらい
1	オリエンテーション	1	必要な材料の探究及び吟味するための基礎を培わせる。
2	観察と精密描写	2	ものの見方･感じ方の基礎を培わせる。
3	変形とレイアウト	4	発想力・構想力の基礎を培わせる。
4	下絵	2	予想する力・見当をつける思考力の基礎を培わせる。
5	色彩学習と配色計画	4	表現方法の基礎を培わせる。
6	ポスターカラーの使用法	4	材料・用具の活用方法の基礎を培わせる
7	彩色とまとめ	8	創意工夫して総合的にまとめ上げる力及び自己確認力の基礎を培わせる。

学習過程とその実際

①　オリエンテーション

まず、題材についての大まかな学習の流れを説明する。そして、自分自身が興味関心のある自然物や人工物を準備させ、観察するための道具も各自で持参してくるようしっかりと呼びかける。ここで大切なことは、学習活動の中で自分の必要な材料は、自分の足で探させるという点である。なぜならば、生徒自身が「よし、これを使ってやってみよう！」という点に至るまでには、精一杯の想像力と行動力を発揮し、自らの力で自らが意欲を向上させようとする努力の糸口になるからである。「どんな姿勢で取り組みをスタートさせるか？」は、今後の学習活動を大きく左右する原点となる。

②　観察と精密描写

(指導のポイント)

モチーフを観察する際は、日頃なかなか気づかない美しい形や色を発見させるためにあらゆる観察方法を示し活動させることが重要である。そこで留意事項として分解や切断はどの段階でも可能であるが、全形の観察については最初の段階でなければできないことであるということをしっかりと生徒に呼びかけておく必要がある。また、精密描写において

は、細部まで入念に描かせることによって、変形する際の良いヒントを生むことができるので、この点においても十分に留意させたい。

(意義と効果)

観察するということは、しっかりと心を働かせ手を動かしながら、あらゆる観察方法（分解、切断、拡大、全形の観察、五感で感じる等）を用いて、新しい発見をしようとする意欲が育成できる。また、精密描写をすることにより、スケッチする力を高めることができるという効果も生まれる。

③　変形とレイアウト

(指導のポイント)

変形させる際に大切なことは、必ずていねいに描かせることである。しかし、描くことが苦手な生徒に対しては、フリーハンドで描くことに難しさを感じるため、意欲も半減してしまうことが予想される。そこで、定規やコンパスを勧めてみると、思ったように形を描くことができ、生徒は大変満足感を持ち活動することができる。次にレイアウトについては、ある程度の基本パターンを紹介しておくことによって、数多くのアイディアスケッチをすることができ、思考レベルを高めることができる。

(意義と効果)

変形については、精密描写をもとに一つのモチーフから直線・曲線を使い、まずは簡単に強調化や単純化させ変形することによって、この時点ですでに２つのアイディアスケッチをすることができることになる。また、発想の困難な生徒についてもこのことが発想のきっかけづくりになるといえよう。「１が２を生み、２が３を生み・・・」というように結果的には大きな変化を生むこととなる。また、レイアウトについては、基本的なパターンを理解させることによって、自分なりの独特な画面構成ができるようになる。生徒にとってはこの学習段階が最も苦しい場面であるといっても過言ではない。発想するということはまさしく産みの苦しみである。また、充実感や達成感は自分自身と同じ背の高さには存在するものではない。少し背伸びをしなければ届かないところに存在するからこそ、目標に到達したときの感動は偉大なものに成り得るのである。

④　下絵

(指導のポイント)

下絵については八つ切り画用紙に描く。③の段階でレイアウトをスケッチブックの４分の１の大きさでアイディアスケッチを行っているため、必然的に構成を拡大しなければならないので、それぞれの形をどの程度拡大すればよいのか、画面全体のバランスをよく考えて見当をつけるように呼びかけておくことが大切である。

(意義と効果)

下絵については、まずレイアウトのアイディアスケッチの中から、生徒自身が最も描いてみたいものをピックアップさせ、それをもとに本番用の画用紙に下絵を描かせる。そのような方法をとることによって、自分自身の制作に対する責任感も生まれてくる。

⑤　色彩学習と配色計画

(指導のポイント)

色彩学習においては教科書や資料集を使用し、理論的に教えることが大切である。また、配色計画においては、配色カードを使用し下絵となったアイディアスケッチにそれぞれ一つ一つ何色を塗るのかということをメモさせ、全体の色彩のバランスを確認させることが大切である。

(意義と効果)

色彩学習は色で表現する際に知識として身につけておくことによって、色彩を駆使し配色計画をたてることができる。また、配色計画をたてることによって、画面全体の色彩のバランスを考えることになるので、色彩感覚を磨く一つの手だてとなる。

⑥　ポスターカラーの使用法

(指導のポイント)

教師がポスターカラーの塗り方を一つ一つ説明しながら実演してみせる。その学習内容は次のとおりである。

・　ポスターカラーの特性の説明
・　ポスターカラーの出し方及び溶き方
・　デザイン筆の特長及び筆の動かし方
・　机上のセッティングの仕方　　等

(意義と効果)

教師が実際に技術指導の実演をして見せることによって、生徒自身に「自分にもできるかもしれない。」という気持ちにさせることが重要である。また、中学生の発達段階としては、「形の枠からはみ出さず美しく塗りたい」という本能を持っている。この本能と技能が合致したとき、生徒は「自分にもできた」という満足感を得る。たとえそれが小さな四角形の彩色一つであっても、苦手意識を持つ生徒にとっては大きな自信とやる気を得ることになる。小さな世界から夢は大きく広がり、さらなる創作意欲をかき立てられるのである。

⑦　彩色とまとめ

(指導のポイント)

生徒は彩色している際に、形からはみだしたりすると、途中で集中力が途切れそうになるときがある。そのときこそ慌てずに一旦その部分が乾くまで手をつけず、ポスターカラーの滲みにくいという特長を生かし、隣の形を塗るときにカバーする方法もあるということをアドバイスしておくと、それをもとにして生徒は自分なりのフォローの仕方を考えることができる。

(意義と効果)

彩色する際に、生徒は美しく塗ろうと努力する。しかし、時として失敗することもある。そのときこそ、失敗したときのフォローの仕方を考えさせることが大切である。そのよう

な体験をくり返すことによって、たとえ失敗しても物事を冷静に考え判断し適切な対応をとることができるようになる。失敗を本当の失敗にさせないために、創意工夫させ試行錯誤することを促しながら努力させる態度を育てていくことが重要である。

「自由な表現教育」ということが叫ばれていたことがある。一見、自由という言葉は聞こえは良いが、ただの放任に過ぎないという実態も多くみられた。そこで、大切なことはやはり基礎的な技能をしっかりと身につけさせ、学習活動に行き詰まったときこそ、それを乗り越えられる強い精神力と生涯にわたり美術を愛好していく豊かな心を育成し、中学校を卒業させたいと考えている。

4　平面構成から学ぶもの

新しい教育課程が実施されてから教科の時間数は全体的に減少している。中でも実技教科の美術や音楽は従来より半減したといってもよい。こうした少ない時間のなかで美術教育の目標を達成することは現実的には困難な状況になっている。絶対的な時間数の不足による学習内容の削減は否めないからである。こうした状況に対して、学校教育実践の現場では美術教育の目的を達成するために、題材の選択、教育方法・学習方法の工夫、基礎・基本の定着などの様々な試みを行っている。そのような試みの中で平面構成の持つ意義を以下に考察する。

美術教育においても系統的学習と問題解決学習がある。また、問題解決だけでなく個人の世界や心象の表現としての課題解決学習がある。さらにひとつの題材の中にそれらの学習内容が含まれることもある。たとえば風景画の学習を想定してみると、構図や色彩の内容はある程度の系統的な学習によってそれぞれの基礎・基本を理解しておく必要がある。その上で、個々の状況における心象や印象を表現することができる。端的に言うならば、心象表現の題材においても、表現のための知識と技術を習得しておく必要があるのである。

このような意味から平面構成の題材は系統的な学習と課題解決学習の両面を含み、しかもイメージを喚起させる学習内容といえる。具体的なデザインの学習に比べて制約も少なく心象表現と目的表現の両面を兼ね備えている。図版に取り上げている作品は具体的な対象をイメージしたものもあるし、逆に自然物や人工物の具体的事物から幾何学的にあるいは抽象的に処理をしたものもある。いずれにしてもイメージの表現を形態と色彩、構図、パターン、触覚感などを組み合わせながら制作しているのである。こうした学習は造形の要素的な学習であり、この過程を通して写実とは異なった造形方法を習得し、思考力や判断力を身につけることができる。

美術教育の意義のひとつに作品を制作することによる達成感や成就感の感受がある。そしてそのためには表現技術の習得とイメージの形成能力が必要となる。現在の中学校美術科の授業時間数では1学期に１題材を実施することさえ困難な状況であろう。現実に、ここに取り上げた平面構成においても25時間を要している。知的発達の著しい中学生においては表現技術と絶対時間数を保障してこそ作品制作の達成感と成就感を感受することができる。単時間の造形遊びのような題材はアイデアの創出や材料体験としての啓発には意義があるが、美術作品の制作を通して得られる成就感は少ないであろう。また、写実表現による絵画においては視覚型にしろ触覚型にしても制作のための時間数を保障しなくてはならない。短時間でスケッチに淡彩という表現方法では対象への個々の思いを十分に表現す

ることができないと思われる。写実表現だけでなく再現的方法によって造形的な変換を行う場合においても、表現の多様性を鑑賞や知的理解によって習得する必要がある。平面構成の題材では観察や精密描写、変形、配色といった制作過程を明確にしながら確実に習得することができる。このことは児童生徒の自信につながるといえる。

自然物から構成へという題材は戦後のデザイン学習のなかで常に取り扱われてきた基礎的な内容である。この題材は工夫することによって意義を深めることもできる。例えば新しい教育課程で取り上げられているわが国の伝統文化の見直しやアジア諸国の文化理解ということに関連付けることができよう。日常的な対象物からパターンを作成する場合に、日本的紋様や色彩の特徴を参考にすることによって、伝統文化を知る契機ともなる。また、アジア諸国の工芸品などに見られる装飾模様を参考にすることによって、民族や宗教と造形の関連を学習することも可能である。このように基礎的な題材であるだけに、方向性を工夫することによって美術教育の目的を達成する手段となりうるのである。

美術教育の目的のひとつの創造性の側面では、平面構成の練習は工夫をするという点で試行錯誤をすることによって創造的な表現へとつながるであろう。形や色の決定において個々の小さな比較と決断を行いながら制作をすることによって、造形的美的世界における問題解決を繰り返すこととなる。この小さな決断の積み重ねによって表現への自信が身についてくるであろう。さらにイメージと完成作品との比較をすることによって自分自身の美的感覚を確認することができる。そこには教師の介在が必要であり、教師は多様な作品への対応と理解が必要となる。

参考文献

児島邦宏　「生きる力」を育てる教育課程　明治図書　1998年

付　　記

本稿の作成に当たり、1，4章を福田が担当し、2，3章を宇多田が担当した。全体を福田がまとめた。

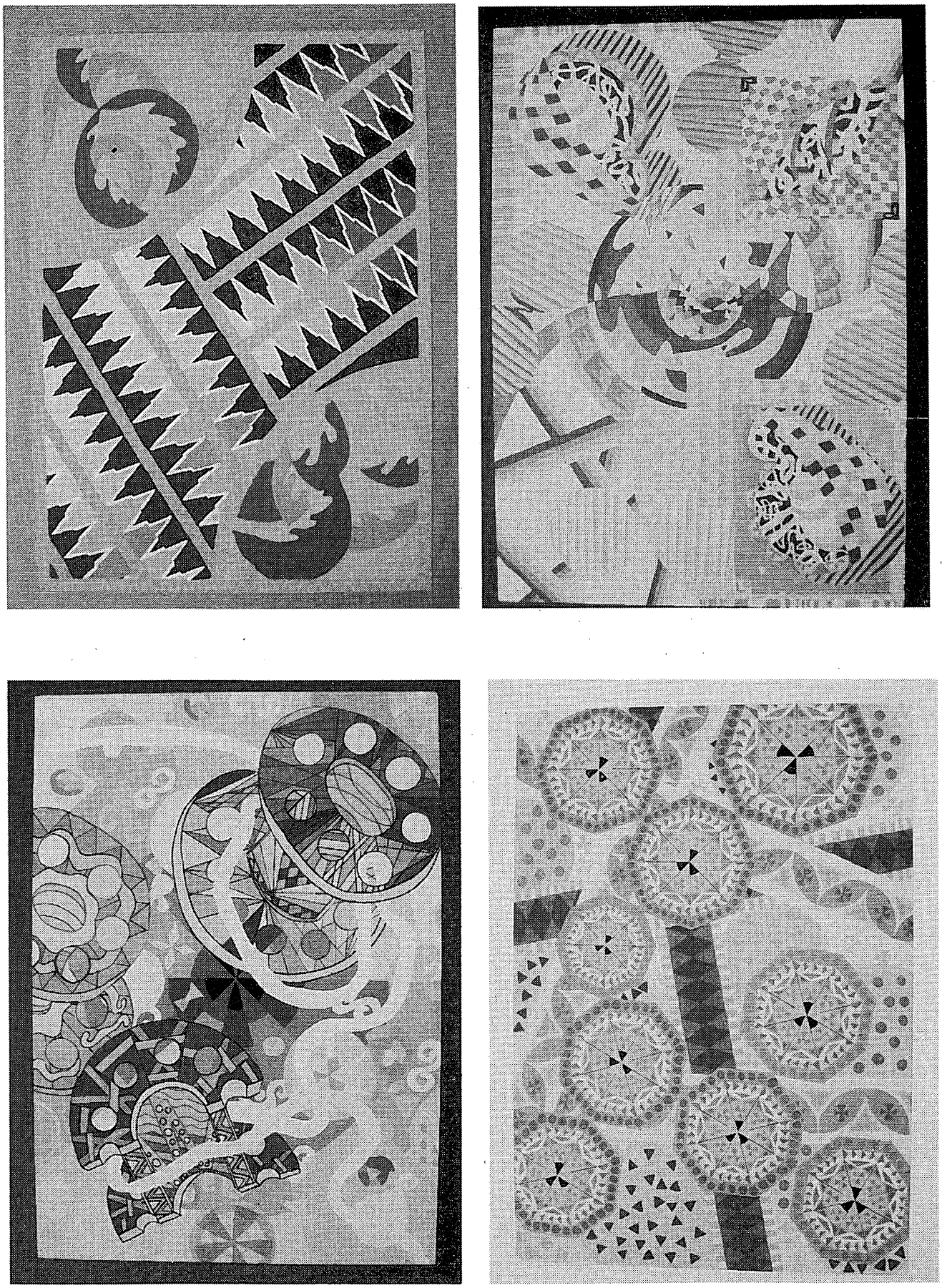

図1

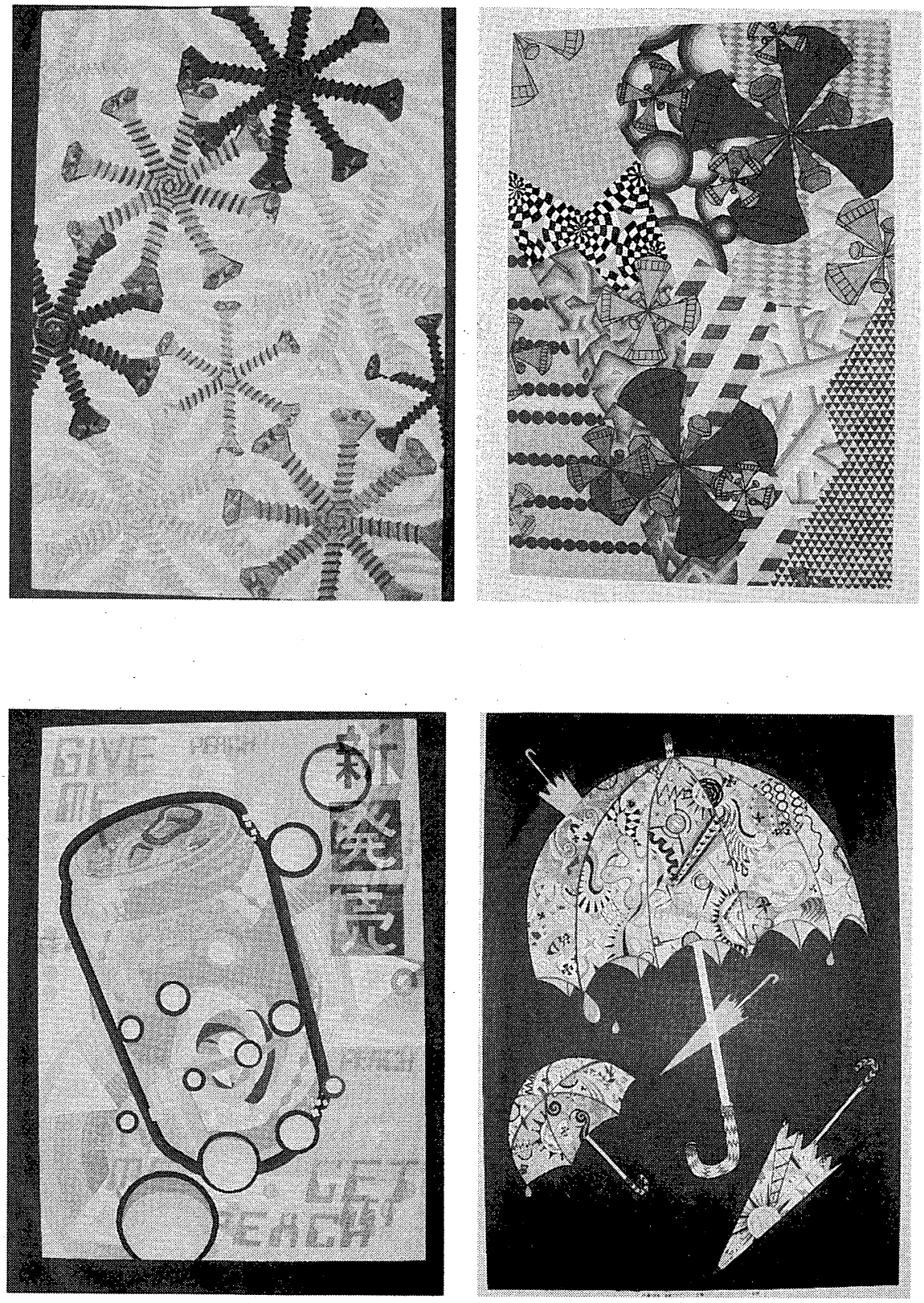

図2